

何が同一であれば人間は変化に耐えうるか

——人新世+トランスヒューマニズム+Post-Truthと倫理学

奥田太郎（南山大学社会倫理研究所／人文学部）

倫理学の使命=人間としての死活的な同一性の確定 (cf. 加藤尚武『現代倫理学入門』1997)

…存在論としての倫理学：人間は自らの同一性を守ることができるのか？そもそも、守られるべき人間の同一性とは何なのか？という問いに取り組む哲学的な営為。

21世紀における人間の存在環境の変化とその倫理的含意

(a) 人新世 (anthropocene)：自然環境の変化

- もはや地球の地質は、人工物によって構成される時代区分に入っている。
- 完新世に次ぐ人新世においては、自然が、克服すべきものでもなく、護るべきものでもなく、人間の営みそのものになる。変化させられるものとしての自然ではなく、変化させられたものそれ自体が自然である。…「環境危機」という問題は雲散霧消する。
- この転換が、人間の思想レベルでなく地球の物理レベルで生じていることを告げるのが、人新世の到来という地質学的な指摘の倫理的含意である。→気候工学などによる物理的介入の動きを促す
- 人新世にあつては、自然としての人工環境によって人間自身がそのエトスを変更することを求められる。…人間の同一性を脅かす？ いや、そもそも人間とはそういうものだった？

(b) トランスヒューマニズム (transhumanism : >H or H+)：身体環境の変化

- 科学技術による人間の身体能力・認知能力の増強を、現在の人間のレベルを超えて実現させることを支持する立場。…これまでもそうしてきた？
- 20世紀後半に生命倫理が立ち上がったとき、医学・生物学の進展のなかで維持されるべき人間の同一性の重要要素として「自律」の原理がカント倫理学から剔抉された。(ジョンセン『生命倫理学の誕生』)
- カントの自律概念が、神による社会秩序の保障なき時代の人間観を提示して、概念的な革命をもたらした(シュナイウィンド『自律の創成』)とすれば、人間の自己コントロール領域を大幅に拡大するトランスヒューマニズムは、人間の自律をさらに徹底した形で質的に転換させるシフターとして捉えることも可能
- 実際、これまでの文明の進展はすべて、前のヒューマニティを刷新し続けてきたのでは？

(c) ポストトゥルース (post-truth)：社会環境の変化

- 事実よりも、人が事実として感じていることを重視する政治状況は、SNSを代表とする情報技術の進展にともなって現出した一方で、主流の真理のあり方に対して、権力批判として解体を試みてきた社会学などの人文知の手法(科学的権威に対して、客観的真理の不可能性を突きつける手法：STS的な言説も含まれるかも?)を権力側が用いることで現出したとも考えうる。…批判知の社会的浸透(あるいは世間知化)により批判知の権威失墜が帰結するというパラドクス？
- そこでは、真理探究という学知の試み自体が、人間の同一性を脅かすテクノロジーとみなされうる。
 - 例) 犯罪率の低下という事実を受け入れることは、「この街は最近外国人によって物騒になっている」という(普通の人間たる)私の感覚を揺るがすし、それは私の信ずる(普通の人間の)世界を揺るがす。つまり、真理探究は(普通の人間たる)私の同一性を脅かす!? →批判知は毒杯を手にするか？

変化のなかで人間の同一性を維持させるもの

- 科学技術の進展の結果としての(a)(b)(c)は、人間の同一性を変化させるのではなく、「人間の同一性」像(人間とはこのようなものだ/であるべきだ、というイメージ)を変化させる。=**人間の同一性の再定義**
- 倫理的思考の営み：既存の倫理を問い直し、規範を更新していくこと。→人間の同一性の再定義を促す
- →人間の同一性は、科学技術の進展や倫理的思考を契機としたその再定義のダイナミズムのなかでこそ維持される。…それ自体が再定義され続けることこそが、人間の同一性の核心。
 - cf. なぜ様々なコンテクストが隔絶している古代ギリシアの書物を私たちは理解できるのか ←読解される時代においてそのつど人間の同一性が再定義されるから。
 - …人文学の可能性の条件としての〈人間の同一性に関する再定義可能性〉→未来の同一性にも外挿
- →再定義を不可能にしない程度の時間をかけるという(神にも理性にも依拠できない人間の)規範の要請

何が同一であれば人間は変化に耐えうるか

人新世+トランスヒューマニズム+Post-Truthと倫理学

奥田太郎（南山大学社会倫理研究所／人文学部）

【補足資料】

◎「人新世」言説の経緯（Fressoz & Bonneuil 2016、邦訳17-20頁）

- 2000年2月メキシコのクエルナバカ、地球圏・生物圏国際共同研究計画（IGBP）会議の席上、大気化学者パウル・クルツェンが発言：「違う！我々は完新世ではなく、すでに人新世のなかにいるのだ！」
- 2002年クルツェンは『ネイチャー』にて、250万年前からの更新世第四紀、11,500年前からの完新世を経て「多くの面で人間活動が支配的となった現在に至る地質時代に『人新世』という用法を与えることが適当である」と提案。
 - 開始時点は1784年（ワットによる蒸気機関の発明特許取得の年：産業革命の始まり+岩石圏から採取された石炭燃焼による大気の「炭素化」を象徴）
- 2012年オーストラリアのブリスベン、第34回国際地質学連合定期総会にて、人新世に関する報告書作成作業部会の結成が決定され、2016年に報告。

◎トランスヒューマニズム思想の経緯

- 1988年、マックス・モアとトム・モロウが*the Extropy Magazine*を創刊。（Bostrom 2005, p. 11）
 - エクストロピー（extropy）概念の提案：科学技術の力によって従来の限界を超えてその力を伸ばし続けるときの、生命体の知能やエネルギーなどの増進・生長の度合い。
- 1990年、マックス・モアが現代的な意味でのトランスヒューマニズムの定義を示した。（More 1990; Bostrom 2005, p. 12）
- 1992年、モアとモロウがエクストロピー研究所を創設。（Bostrom 2005, p. 11）
- 1998年、ニック・ボストロムとデイヴィッド・ピアースにより、世界トランスヒューマニスト協会（Humanity+）が設立される。

◎トランスヒューマニスト宣言（Humanity+ 2016-2018-b）

- トランスヒューマニスト宣言は、1998年にある国際的な著作者集団（Doug Baily, Anders Sandberg, Gustavo Alves, Max More, Holger Wagner, Natasha Vita-More, Eugene Leitl, Bernie Staring, David Pearce, Bill Fantegrossi, den Otter, Ralf Fletcher, Kathryn Aegis, Tom Morrow, Alexander Chislenko, Lee Daniel Crocker, Darren Reynolds, Keith Elis, Thom Quinn, Mikhail Sverdlov, Arjen Kamphuis, Shane Spaulding, and Nick Bostrom）によって起草され、改訂されてきた。以下のバージョンは、2009年3月にHumanity+ Boardによって採択されたもの。
 1. Humanity stands to be profoundly affected by science and technology in the future. We envision the possibility of broadening human potential by overcoming aging, cognitive shortcomings, involuntary suffering, and our confinement to planet Earth.
 2. We believe that humanity's potential is still mostly unrealized. There are possible scenarios that lead to wonderful and exceedingly worthwhile enhanced human conditions.
 3. We recognize that humanity faces serious risks, especially from the misuse of new technologies. There are possible realistic scenarios that lead to the loss of most, or even all, of what we hold valuable. Some of these scenarios are drastic, others are subtle. Although all progress is change, not all change is progress.
 4. Research effort needs to be invested into understanding these prospects. We need to carefully deliberate how best to reduce risks and expedite beneficial applications. We also need forums where people can constructively discuss what should be done, and a social order where responsible decisions can be implemented.
 5. Reduction of existential risks, and development of means for the preservation of life and health, the alleviation of grave suffering, and the improvement of human foresight and wisdom should be pursued as urgent priorities, and heavily funded.
 6. Policy making ought to be guided by responsible and inclusive moral vision, taking seriously both opportunities and risks, respecting autonomy and individual rights, and showing solidarity with and concern for the interests and dignity of all people around the globe. We must also consider our moral responsibilities towards generations that will exist in the future.

7. We advocate the well-being of all sentience, including humans, non-human animals, and any future artificial intellects, modified life forms, or other intelligences to which technological and scientific advance may give rise.
8. We favour allowing individuals wide personal choice over how they enable their lives. This includes use of techniques that may be developed to assist memory, concentration, and mental energy; life extension therapies; reproductive choice technologies; cryonics procedures; and many other possible human modification and enhancement technologies.

◎ポストトゥルース思想の経緯

- 1953年ニューヨークのプラザホテルにて、大手タバコ会社の幹部たちが、喫煙と発ガンの関係に関する科学研究をどうやって妨害するかを画策。個々の研究に対抗するのではなく、「科学と戦う (fight the science)」方針が確定。その後、喫煙と発ガンを関連づける研究に対して、タバコ会社の資金援助による対抗的研究を大量にぶつけることで、「タバコの有害性は科学的に証明されていない」という印象を人々に与えることに成功した。(McIntyre 2018, p. 22-24)
 - A tobacco executive said: “doubt is our product since it is the best means of competing with the ‘body of fact’ that exists in the minds of the general public” (McIntyre 2018, p. 24)
- この戦略は、核の冬、酸性雨、オゾンホール、地球温暖化をめぐる科学的「論争」にも適用されていく。(McIntyre 2018, p. 25)
- ウェブテクノロジーの進展に伴う一連の帰結：人間のもつ認知バイアスの強化。既存メディアの権威の失墜。フェイクニュースの拡散の容易化。

◎Oxford English Dictionaryでの“post-truth”の定義

- 1. Occurring after or resulting from a disclosure of the truth.
 - *Sunday Mail* (Brisbane) 1 Sept. 1985: “post-truth trauma”
- 2. Relating to or denoting circumstances in which objective facts are less influential in shaping political debate or public opinion than appeals to emotion and personal belief.
 - *Nation* (N.Y.) 6 Jan. 1992: “We, as free people, have freely decided that we want to live in some post-truth world.”
 - R. Keyes, *Post-truth Era*, 2004: “In the post-truth era we don’t just have truth and lies, but a third category of ambiguous statements that are not exactly the truth but fall short of a lie.”
 - *Guardian* 11 Sept. 2012: “The press is grappling with so-called post-truth politics, or the tendency among candidates in election year not just to twist the facts but to keep blatantly doing so even when they’re caught.”
 - *Herald* (Glasgow)(Nexis) 17 Nov. 2016: “Social media...has become a post-truth nether world in which readers willingly participate in their own deception because it feels good.”

◎Anthropocene +>H+Post-Truth (=A->H-PT) の時代における倫理学

- 「未確定領域功利主義」(伊勢田2012、第4章；特に98-99頁)
 - 確定領域：現存する道徳的規則や、相克する規則から産まれるジレンマに対する現存する解決に従うことで処理可能な状況や問題の領域。
 - 未確定領域：新しい技術などにより、現存する規則に従うだけでは解決できない状況や問題の領域。
 - →功利主義的思考を規則の相克の解消に限定して用いる(べきである)。
- しかし、この短期ヴィジョンの規範倫理学的路線だけでは、A->H-PTの時代における私たちの〈よき生〉への方向性を示すうえでは不十分。→〈人間の同一性に関する再定義可能性〉という形而上学的観点へ。

【引用資料】

◎倫理学とは何か

- ① 人びとが「価値観が変化する」と信じていることは、価値判断以外の別の要因の変化なのであり、価値判断は本質的には変わらない。だから異文化同士が接触したり、時代の変化が急激であるときには、「何が同一であれば変化に耐えられるか」こそが問題になる。(加藤2018、149頁)
- ② 人間が人間であることを守らなければならない。これは人間の同一性を守らなければならないということである。われわれは人間らしさの観念と現実を、歴史と世代を通じて伝えていかななくてはならない。／しかし、人間とは自分自身の同一性ですらも不確かな存在なのだ。その人間が人間性の同一性を守る

ことができるのかどうか。できるかどうかという以前に、その同一性とは何なのか。こうして私たちは新しい問いの前に立つ。読者はここで存在論としての本来の倫理学の入口に到達したことになる。(加藤2018、158頁)

- ③ 応用倫理学とは、既存の原理原則を個別の行為事例に応用〔適用〕し、個別事例を既定の一般的規範の光によって判別する決疑論ではなく、むしろ具体的な問題に関わることによって、行為の全クラスの評価を顧慮しつつ一般的規範の内容をさらに書き加えていく、その意味で「規範形成的応用 (normbildende Anwendung)」を行うものである。(丸山2000、82頁)
- ④ いかなる立場からどのように倫理を捉えるのか。この問いに対する応答は、私たちが直面する個々の問題に対して個別的に立ち上がってくる。さまざまな理論的立場はそれぞれに説得力をもち、それぞれに弱点をもつ。また、それらはそれぞれに首尾一貫性をもち、部分的には一方が他方を論駁することもありうる。しかしながら、そうしたすべての理論的立場のいずれか一つが、独占的な真理を手にして勝ち残ることは、事柄の構造上、不可能なのである。特定の理論的立場の説得力も、また、決定力のなさもともに、共通の源泉、すなわち、「個々の問題に対して個別に立ち上がってくる他はない」という倫理と倫理学の固有の構造に由来している。(奥田2012、185頁)

◎人新世

- ⑤ 二〇〇〇年代に地球システム科学の研究者たちによって提唱された人新世は、我々の身に起きていることを理解するために不可欠な意識の目覚めとなった。なぜなら我々の身に起きていることは環境危機などではなく、人為的な地質学的革命だからだ。(Fressoz & Bonneuil 2016、邦訳9-10頁)
- ⑥ 地理学者アール・エリスは「『人間が掻き乱した自然の生態系』という世界観に取って代わるのは生物圏についての新たな観点、すなわち『自身の懐に自然の生態系を取り込んだ人間系』という世界観である」と結論づけている。(Fressoz & Bonneuil 2016、邦訳25頁)
- ⑦ 危機という用語は過渡的な状態を意味するが、人新世は引き返しのできない地点なのである。人新世は地質学的な分岐点を意味しており、それは完新世の「通常状態」に、予知の可能な状態には戻れないことを意味する。／したがって人新世の概念と地球システム科学の最新研究が鳴らす警鐘は、「環境危機」を高らかに警告してきた人間中心主義的な視点をはるかに超えたところにある。(Fressoz & Bonneuil 2016、邦訳38頁)
- ⑧ 我々は人間と自然の和解という、政治の下位にある平和主義的な問題系の中にいるのではない。人新世は政治的であり、相違する利害関係の間、地球上で拮抗する様々な人間の圧力の間、異なる人間集団(階級や国家)の間、そして様々な技術的選択や産業的選択、生活様式また消費様式から生まれた人間の痕跡の間の調停を必要とする。だとすれば、重要なのは政治的な問題として人新世に真剣に取り組むことであり、過去二世紀の間に普及した近代モデルの矛盾と限界を乗り越え、すばやく、そして平等に分配された形で生物学的痕跡(エコロジカル・フットプリント)を削減するための道を探ることである。(Fressoz & Bonneuil 2016、邦訳45頁)
- ⑨ 人新世は工業的近代性の「地上を離れた」人文学に代わり、「環境」と「社会」の大きな分断を超えた場を検討する新たな環境学的人文学を要求している。(…)人新世においては、「社会」関係が生物物理的なプロセスに満ちていること、そして様々な規模で地球システムを行き交う多様な物質とエネルギーが、社会的に構築された人間活動により局在化されてきたことを隠蔽するのはもはや不可能なのだ。(Fressoz & Bonneuil 2016、邦訳52-53頁)
- ⑩ 人新世を思考するとは、「環境危機」からの脱出というつかの間の希望を捨て去ることだ。取り返しのつかない亀裂は、過去二世紀間の産業発展が成し遂げた、短くも桁外れなこの瞬間のなかで我々の背後に迫っている。人新世はそこにある。これが我々の新たな条件なのだ。(Fressoz & Bonneuil 2016、邦訳344頁)

◎トランスヒューマニズム

- ⑪ The concept of eupraxophy encompasses within it humanism, transhumanism (including Extropianism), and possible a future posthumanism. **Humanism** is a eupraxophy or philosophy of life that rejects deities, faith, and worship, instead basing a view of values and meaningfulness on the nature and potentials of humans within a rational and scientific framework. **Transhumanism** is a class of philosophies that seek to guide us towards a

posthuman condition. Transhumanism shares many elements of humanism, including a respect for reason and science, a commitment to progress, and a valuing of human (or transhuman) existence in this life rather than in some supernatural "afterlife". Transhumanism differs from humanism in recognizing and anticipating the radical alterations in the nature and possibilities of our lives resulting from various sciences and technologies such as neuroscience and neuropharmacology, life extension, nanotechnology, artificial ultraintelligence, and space habitation, combined with a rational philosophy and value system. (More 1990)

⑫ Humanity+ formally defines it based on Max More's original definition as follows:

1. The intellectual and cultural movement that affirms the possibility and desirability of fundamentally improving the human condition through applied reason, especially by developing and making widely available technologies to eliminate aging and to greatly enhance human intellectual, physical, and psychological capacities.
2. The study of the ramifications, promises, and potential dangers of technologies that will enable us to overcome fundamental human limitations, and the related study of the ethical matters involved in developing and using such technologies.

Transhumanism can be viewed as an extension of humanism, from which it is partially derived. Humanists believe that humans matter, that individuals matter. We might not be perfect, but we can make things better by promoting rational thinking, freedom, tolerance, democracy, and concern for our fellow human beings. Transhumanists agree with this but also emphasize what we have the potential to become. Just as we use rational means to improve the human condition and the external world, we can also use such means to improve ourselves, the human organism. In doing so, we are not limited to traditional humanistic methods, such as education and cultural development. We can also use technological means that will eventually enable us to move beyond what some would think of as "human". (Humanity+ 2016-2018-a)

◎自律：カント、生命倫理、そしてトランスヒューマニズム？

⑬ 善であるとは道徳法則によって決定された意志によって意志されることである。われわれの意志はそういう意志であり、神の意志も同じである。カントは、かつて解決しようとした神と神による選択結果の善性との関係を人間の実践理性へと置き換える。カントは次のような驚くべき主張をしている。すなわち、神とわれわれが単一の道徳共同体の成員資格を共有できるのは、われわれのうちの誰もが等しく自ら従うべき法を制定している場合のみである。円熟期のカントは、人間という行為者と神との明示的な比較をためらわない。(…)カントにとっては、われわれを道徳共同体において神と同じ位置に据えるものは、条件に依存しない永遠の道徳的真理の認識ではない。それは、道徳法則を制定し、それによって生きるわれわれの能力である。神と共有する世界における人間の地位に関して、カントが唯一道徳という点で満足すべき理論と考えるものは、自律を創成することによってもたらされたのである。

(Schneewind 1998, p. 512-513/邦訳749頁：奥田が部分的に改訳。下線は奥田)

⑭ カントはこう言う。奴隷状態にあるか、自らの身体を他人に売り渡すか、自殺するなら、われわれは内なる価値のすべてを失う。自分への義務を果たさない限り、われわれは他人への義務を適切に遂行できない。その場合、われわれは道徳世界の完成に貢献できない。けれども、カントが講義教程の最後で学生に語ったように、それは人間の最終的な使命である。「どの個人もこの目的に従って自らの行為を統制するよう努力しなければならない。そうすることで、各人の寄与は、万人が同様に行為するなら道徳世界の完成が実現される、という形で行われるものになる」。ライブニッツ派にとっては、この世界が必然的に最善の可能世界であるように神は取り計らう。カントは、われわれ自身とともにこの世界をも完成させる責任をわれわれに委ねるのである。(Schneewind 1998, p. 530/邦訳774頁：奥田が部分的に改訳)

⑮ カントは〔厳密に言えば〕人格の尊重よりもむしろ、「道徳法則の尊重」と「意志の自律」を語り、これらの概念を彼の道徳概念のもっとも深い根源と位置づけた。(…)人格の尊重の概念は人を被験者とする実験の問題にふさわしいだけでなく、また単に生命倫理のみならずすべての倫理に、ふさわしい原則であると思われる。(…)／ピーチャムとチルドレスが『生命医学倫理の原則』を出版する頃までに、自律の原則は生命倫理の原則の中で堅固な基盤を獲得していた。二人は「自律」を、「個人が自分で選択した計画に一致して行動の方向を定める場合の、個人的な行動の自由の一つの形態」と定義した。自律の尊重は、「たとえ彼らの判断が誤りだとしても、彼ら自身の熟慮された価値判断や価値観は適正に評価されて承認されること」と規定された。彼らが自律をこのように定式化したとき、彼らはカントの人格(パーソン)の尊重という概念を、ジョン・スチュアート・ミルの全く異なる自由(リバティ)の概念と融合させた。(…)かくて自律の尊重の原則は、「人はどのような行動を当人が望むとも、自由に遂行することができるべきである、たとえその行動が当人にとって深刻な危険を含んでいよ

うとも、またその他人がその行動を愚かしいと考えようとも」となる。(Jonsen 1998, p. 335/邦訳418頁)

- ⑩ 自律や自律尊重の原則は、生命倫理学において重要な概念となったが、私の見るところ一つの混合物である。それは全く異なる三つの源泉から合成されている。——個人の神聖さという神学的教義、個人の独創性の哲学的強調、米国の精神風土(エートス)における個人中心のあり方、である。(Jonsen 1998, p. 337/邦訳421頁)
- ⑪ 個人の神聖さというキリスト教の原則が世俗化していく過程に、自律の尊重という倫理原則が果たしている中心的役割を認めることができる。個々の人間は、認識し、意志し、選択し、耐える実体として、価値の中心に据えられている。人生を形成する彼の自由(リバティ)は、許容され、促進され、保護されなければならない。伝統的な教義の中で人間の自由(ヒューマン・フリーダム)と常に緊張関係を持ちながら存在してきた、神の権威が有する支配力は、生命の神聖さの非宗教的な解釈によって退けられることとなった。各個人の自由(フリーダム)は、もはや超越的な立法者に直面することもなく、無比の存在と化した。伝統的な教義も同様に、人間の自由を、共同体の権威の内側で、その権威に制限されて、形成されたものと見なしていた。〔生命の神聖さの〕非宗教的な解釈は、共同体との接触を喪失し、各自の自由は各他者の自由と直面するようになった。人の自律は価値の中心となっただけでなく、唯一の価値となった。(Jonsen 1998, p. 338/邦訳423-424頁: 奥田が部分的に改訳)

◎ポストトゥルース

- ⑫ The idea of a single objective truth has never been free from controversy. Is admitting this necessarily conservative? Or liberal? Or perhaps it is a fusion, whereby largely left-wing relativist and postmodernist attacks on the idea of truth from decades ago have now simply been co-opted by right-wing political operatives. (McIntyre 2018, p. 6)
- ⑬ For now, however, the question at hand is not whether we have the proper theory of truth, but how to make sense of the different ways that people *subvert* truth. (McIntyre 2018, p. 7)
- ⑭ Rather, what seems new in the post-truth era is a challenge not just to the idea of *knowing* reality but to the existence of reality itself. (McIntyre 2018, p. 10)
- ⑮ If one looks at the Oxford definition, and how all of this has played out in recent public debate, one gets the sense that post-truth is not so much a claim that truth *does not exist* as that *facts are subordinate to our political point of view*. (McIntyre 2018, p. 11)

文献

- 伊勢田哲治 [2012] 『倫理的に考える』 勁草書房。
- 奥田太郎 [2012] 『倫理学という構え: 応用倫理学原論』 ナカニシヤ出版。
- 加藤尚武 [2018] 『加藤尚武著作集 第6巻 倫理学の基礎』 未来社。
- 丸山徳次 [2000] 「われわれの応用倫理学の源泉としての〈水俣病事件〉」 川本隆史・高橋久一郎編 『応用倫理学の転換: 二正面作戦のためのガイドライン』 ナカニシヤ出版。
- Bostrom, Nick [2005] "A History of Transhumanist Thought," *Journal of Evolution and Technology*, vol. 14, 1-25.
- Fressoz, Jean-Baptiste et Bonneuil, Christophe [2016] *L'événement Anthropocène: La Terre, l'histoire et nous*, Seuil. (クリストフ・ボヌイユ、ジャン＝バティスト・フレソズ(野坂しおり訳) 『人新世とは何か: 〈地球と人類の時代〉の思想史』 青土社、2018年。)
- Humanity+ [2016-2018-a] "Transhumanist FAQ," <https://humanityplus.org/philosophy/transhumanist-faq/> [2018年11月16日確認]
- [2016-2018-b] "Transhumanist Declaration," <https://humanityplus.org/philosophy/transhumanist-declaration/> [2018年11月16日確認]
- Jonsen, Albert R. [1998] *The Birth of Bioethics*, Oxford University Press. (アルバート・R・ジョンセン(細見博志訳) 『生命倫理学の誕生』 勁草書房、2009年。)
- McIntyre, Lee [2018] *Post-Truth*, The MIT Press.
- More, Max [1990] *Transhumanism: Towards a Futurist Philosophy*. (ウェブ上の記事。現在は削除されている。)
- Schneewind, J. B. [1998] *The Invention of Autonomy: A History of Modern Moral Philosophy*, Cambridge University Press. (J. B. シュナイウィンド(田中秀夫監訳/逸見修二訳) 『自律の創成: 近代道徳哲学史』 法政大学出版局、2011年。)